

「うわけだ」と聞いたら、兎玉と後藤の、台湾総督と民政長官の間で植民政策としていろんな大きな仕事をするのだが、それは今日のように書類をつくったり、何べんも会議をしたりということはほとんどない。ちよつと考えておこうといつて二三日もたちますかいな。そうすると廊下でばったりと会うと『どうだ、後藤、あれやろうか』後藤は『ちよつとわしに考えさせてくれ』何日かたつて今度また便所かどっかで会うと『総督やりましたよ』非常な大事業をやるのもそのくらいの調子で行くんだそうだ。これは形式こそ非常にシンプルで偶発的のように見えるけれども、両方とも大人物だからだ。仕事なんてものは、そういうふうには社長と専務なり支配人なりの間が行かずにやいかん。政治でいやア総理大臣と閣僚の間は、そういうふうに行かずにやいかんかんだという話をして聞かしたことがあった。

北村 金子さんという人は科学や技術の世界を出た人じゃないけれども、非常に早くそれに目をつけた。これは非常な卓見だと思うね。サイエンスに対して、非常な傾倒を持っておつて、その道の人を尊敬する。これはああいう経歴の人には珍らしい。とかく独りよがりだ、独断的にものを決めようとする傾向があるべきであるが、金子さんは決断は非常によくやつたけれども、ちゃんと学者の意見は聞くことは聞いて、サイエンスを非常に尊重した。これはえらかったと思うな。今だいぶ世代が変つて、ああいう経営者はいないな。

大屋 ちよつと見当らんね。

北村 後藤新平さんの話が出て思い出すのだがね、鈴木木屋台骨が傾いたとき、後藤さんが新聞記者にこんなことをいつていた

のを私は今思い出した。「オレは鈴木商店から一文の金も貰ったこともないし借金した覚えもない、しかし金子直吉からはずいぶん智慧を貰ったし、またどつさり智慧を借りているよ」面白いじゃないか。

大屋 全くね。

北村 こんな話もある。武蔵博士がヘーゲルの哲学書の処女出版をしたとき、息子がそんな本を出したということをオヤジはどこかで誰からか聞いて帰つて、武蔵さんにおまえの書いた本をおれに見せよといった。夏の夕方で庭の木蔭に籐椅子を出させてそこでオヤジさんはそれを読んだ。武蔵さんにすると、オヤジは一分間位本をめぐつてみて、もうよしと突き戻すだろうと思つて待つていたが、とにかく三、四十分は読んでいた。そして紙と硯を持って来いといつて、オヤジさんは、こう書いたそうだ。屁化留はわか蘭(ヘーゲルはわからん)これが題で次に一句

蟬鳴くや 樹下のあるじはつんぼなる

この親子風景はちよつと面白い。

〈帝人会長大屋晋三氏との対談〉

金子直吉翁、自ら著した書物はごく少く本号で紹介する「経済野話」は大正末期の金融恐慌が吹き荒れ、鈴木商店が破綻するほぼ3年前の大正13年6月に初版が発行されています。その後昭和8年の6版が発行されたことが記されています。同書は、直吉翁の経済論を披瀝したもので、直吉翁の経営哲学を垣間見る著書と言えるかもしれません。

本号では、紙面の都合から「経済野話」の「序」の部分を転載し、次号で本文を紹介いたします。

金子直吉著

「経済野話」

序

丁度大正十一年春、櫻の花の散つた頃であつた。東京ステーションホテルの二十號室で色々の事を默想して居つた。其時ふと次の様な事を考へ始めた。

大正九年以來、日本の財界は、まるで石垣の壊れる様に大動搖を來たし、我國の大事業家、大實業家が續々倒産しつゝ、あるのは如何なる原因であろうか、又此の人々は何の罪科が有つて、斯くの如く不幸な破綻の逆境に遭遇したのであるのか、某君にしろ、某々君にしろ、何れも日本の立派な代表的實業家として、從來随分國家的貢獻を爲し來たつたものであつて、假令其間に多少不眞面目な仕事をした事があつたとしても、それは大體から言へば、玉に瑕位のもので、其功は罪よりも遙かに多大であるからして、斯くの如き憂き目を見るべき理はないのである。何うしても之には何か深い原因があるものに違ひないと、段々冥想を續けて行つた。そうすると何時の間にか夢の中に這入つて

しまつた。それから暫くして、夢から醒めて氣の付いた時に、私の頭には斯んな考が浮んで來た。或は之を天來の福音とでも名くべきものであるのか、つまりそれは次の様な考である。

日本の經濟界の實情は、輸入超過の爲め年々通貨が減少するから利息が高くなり、其結果有價證券其他の財産の評價が減少し、資本の減少となり、信用が氷結してしまつたから、今迄手廣く商賣をやつて居つた者から、眞先に倒産し、夫れから次第に小さい商人迄も倒れて仕舞う運命に成つて居る。故に之を救済し、日本の財界の建替をやるうと思ふならば、何うしても早く在外正貨の賣止を爲し、同時に通貨の増發をしないと云ふと、日本の國民それ自身は、恰もお伽蛇の身體を喰ふより外に仕方がないのである。即ち始めは尻尾の所からして、遂には臍の邊迄も段々と喰ひ減らして行き、終には首の付け根迄も喰ひ詰め、借金で首の廻らぬ位の騒ぎではなく、餓えて青黒い生氣の無い顔をした首ばかりが残つて居るような事になり、日本國中はまるで、炭團屋の庭先ではないが、首ばかりがごろごろ轉がり廻つて居る様な状態になるであらう。

そこで私は此夢から思ひ付いた考を基礎として、暇のある毎に色々考へたり、又時々新聞などにも斷片的に卑見を述べて見た事もあり、先輩と意見をも戦はした事があつた。私の考は正しいか否かは分らないが、唯だ私の考へに間違のないと云ふだけの信念と、今や此等の考へを幾分纏めて來たと云ふ自負心だけは出來た。

丁度住田君がやつて來て、私の考へた事を一通り纏めて話しをした時に、同君が之を清書して持つて來て呉れたので、此際「経済野話」と題して公刊する事にした。道は遠くて夜は暗い。然し此書が、暗夜の一燈とでもなれば、それは私の一生の光榮とする所である。

大正十三年五月

東京ステーションホテル二〇號室にて

著 著